

令和2年度 大阪市特別支援教育モデル研究

【テーマ④】

読み書きに困難さを抱える児童への指導

—かな10単語聴写テストを用いた
かな学習の定着について—

大阪市立三軒家東小学校

I 問題の所在

ひらがな・カタカナの読み書きの習熟が十分でない児童は読み書き困難を示しやすく、国語科や他の教科における低学力につながりやすい。ひらがな・カタカナの読み書き学習の定着は低学年児童における重要な学習課題である。

本学では、中学年になっても促音が抜け落ちたり、拗音の理解が不十分であったりする児童が見られ、そのことから書くことに抵抗を覚える児童もみられる。特に本年度は、新型コロナウイルスの影響もあり、年度当初に十分なひらがなの学習時間を確保することができなかったこと、その間の家庭学習の有無により、児童間の理解度に差が生じてしまったことが問題となっている。そこで、低学年のうちに基礎的な読み書きの能力を、全体的に高めると同時に、国語学習の出発点であるひらがなの学習の差を可能な限り縮める必要性が生じている。

本報告では、かな10単語聴写テストを用いて評価を行い、通常の学級で実施できる読み書き指導の方法について検討する。

Ⅱ 目的

1 小学校1年児童に対して、ひらがな学習の確実な定着を図る。

2 かな10単語聴写テストを用いて評価を行い、通常の学級で実施できる読み書き指導の方法について検討する。

5	4	3	2	1	
ふ	か	き	ぺ	め	
う	け	っ	ん	が	() 年ねん
せ	っ	ぶ	ぎ	ね	
ん	こ		ん		() 番ばん
10	9	8	7	6	名前 なまえ
し	し	き	し	お	
よ	よ	ゆ	ゆ	と	
う	っ	う	く	う	
ぼ	き	り	だ	さ	
う			い	ん	
し					
や					

Ⅲ 方法

【1】対象児 通常学級1年生(2学級) 54名

【2】手続き

10月上旬

テスト
指導前



指導
①



12月中旬

テスト
指導後
①



指導
②

3月上旬

テスト
指導後
②



- ①テストは特別支援教育コーディネーター(CO.)が実施した。
- ②学級の児童の誤り一覧表を作成し、学級の誤り特徴を明らかにした。
- ③誤り特徴に応じた指導法を学級担任とCO.で検討し指導を行った。

【1－2】指導前テスト(9月上旬)の結果のまとめ

- 1 誤答率 (誤答数÷全問題数)は、1組が15.3%、2組が26.4%となった。
- 2 正答数7点以下(要支援)の児童は18名(54名中)であった。うち5点以下は9名であった。
- 3 要素ごとの誤答特徴(誤答率等)から
 - ①特殊音節の誤答率は、
拗音11.5% 促音19.1% 長音16.1%であった。
 - ②濁音・半濁音の誤答率は、6.18%。

【1－3】指導①の指導目標と方法

1. 指導目標

- 1) 全体誤答率を5%以下にする
- 2) 正答数7点以下の児童を0名にする

2. 指導方針

- 1) 誤りが多い特殊音節(促音、長音、拗音)を目標として指導する
- 2) 誤りのある、濁音・半濁音、字形を指導する

【1-3】指導①の指導目標と方法

3. 指導方法

1) 指導内容

① 多い誤りに応じた指導内容

①-1 長音の学習

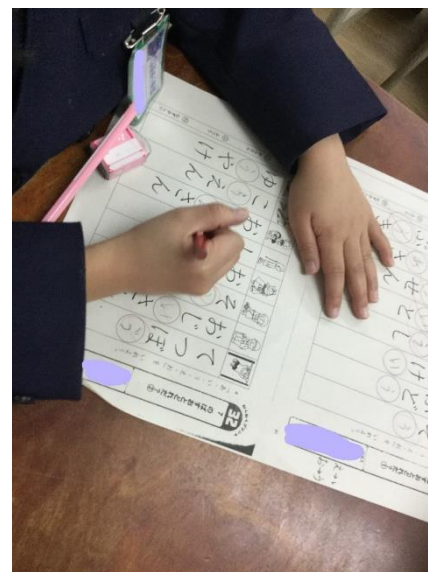
- ・伸ばす音のルール説明
- ・例外を紙芝居で学習
- ・練習プリント5枚(学級と宿題で繰り返して取り組む)

①-2 促音と拗音の学習

- ・ねじれる音の学習(プリント3枚)
- ・ちいさい「つ」を入れる学習(プリント4枚)

②通常学級の指導内容

- ・拗音と促音の学習・・・間違えやすい言葉を絵付きのスライドとしてPPTで作成し、誤りも正解もどちらも読むことで違いに気づけるように取り組む。
- ・学んだことを、簡単な宿題プリントで復習し、定着を図る。
- ・「ンとソ、シとツ」など、混乱しがちな字形について、視覚的に違いを理解できるように（どのように？）支援する。



2) 指導形態等

クラスで10月から11月に、長音の学習、拗促音の学習を**各一校時**で行い、宿題プリントを計12枚、繰り返して取り組む。

PPTをフラッシュカードのように利用して拗音と促音、長音の学習に取り組み、楽しみながら違いを認識できるようにする。

ひらがなの習得に特に困難のみられる児童については、放課後に個別で指導をする。

【2-1】指導後ひらがなテスト①の結果(12月中旬)

1 誤答率 (誤答数÷全問題数)

1組 15.3→8.5% 2組 26.4→ 9.3%

2 正答数7点以下(要支援)の児童数

18名→8名

【聴写テスト結果(一部)】

3 要素ごとの誤答特徴(誤答率等)

①特殊音節

拗音 19.35%→6.65%

促音 19.1%→6.5%

長音 16.1%→9.3%

※ 個人情報保護のため、順番は入れ替えています。

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
めがね	べんざん	きっぷ	かけっこ	ふうせん	おとうさん	しゅくだい	きょうり	しよつき	しょうぼうしゃ
				ふーせん			きょうり	☆	
				ふーせん			おうり		しょうぼうしゃ
				るーせん					しょうぼうしゃ
				ふーせん					しょうぼうしゃ
				ふーせん				しよき	しよぼうしゃ
			かけこ	ふっせん		しゅく☆☆			しょうぼうx
				ふーせん			きゅうり		
				ふっせん				しつよき	
めがね	べんざん								しょうおしゃ
	けんざん		あつけこ	ふーうさん	おとさん			しよき	しょうびょうしゃ
								しよ☆	しょうぼうしゃ
				ふーせん			きょうり		
								しよき	
1	2		1	9	1		3	6	7
1以上の誤答 った児童	4人	空欄：は正 解を示す	☆印：字形に 誤り	誤答率=全誤答数÷全問題数	全誤答数	32	誤答率	9.3	

②濁音半濁音については、外国にルーツを持つ児童が理解しにくい様子が見て取れた。

【2-2】指導後ひらがなテスト①(12月中旬)の結果のまとめ

1 誤答率 (誤答数÷全問題数)

1組は、15.3から8.5%、2組は、26.4から9.3%に減少した

2 正答数7点以下(要支援)の児童は8名(54名中)となった

3 要素ごとの誤答の変化(誤答率等)とミニ考察

①拗音、促音ともに誤答率がかなり減少した。

②拗促音の指導に用いた「間違えやすい言葉を絵付きのスライドとしてPPTで作成し、誤りも正解もどちらも読むことで違いに気づく」という方法に一定の効果があると考えられる。

③長音の「ふうせん」という課題では、「ふーせん」という誤り例の方が児童の印象に残ってしまったようで、伝え方に課題が残った。「しょうぼうしゃ」の「う」の理解が不十分であった。

【2-3】指導②の指導目標と内容

1. 指導目標

- 1) 全体誤答率を5%以下にする
- 2) 正答数7点以下の児童を0名にする

2. 指導内容

- 1) 依然として誤りが多い特殊音節(促音、長音、拗音)を目標として指導する
- 2) 誤りのある、濁音・半濁音、字形を指導する

【3-1】指導後テスト②(3月上旬)の結果

1 誤答率 (誤答数÷全問題数)

1組 15.3→8.5% →2.8%

2組 26.4→ 9.3% →2.7%

3 正答数7点以下(支援の必要な)児童数

18名→8名→ 0名

2 要素ごとの誤答率の変化

拗音 19.35%→6.65%→1.65%

促音 19.1%→6.5%→2%

長音 16.1%→9.3%→0.8%

【聴写テスト結果(一部)】

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
めがね	べんぎん	きっぷ	かけっこ	ふうせん	おとうさん	しゅくだい	きゅうり	しよっき	しよぼうしゃ
				ふうぶん					
					おとうさん				
	べんぎん					しゅくだい			
								しよき	
						しゅくだい			
									しよぼうしゃ
	1				1	1	2		1
以上の誤答 った児童	0人	空欄:は正 解を示す	☆印:字形に 誤り	誤答率=全誤答数÷全問題数	全誤答数	7	誤答率	2.70%	

※ 個人情報保護
のため、順番は
入れ替えています。

【3-2】個別の児童の得点変化の結果

5	4	3	2	1
ふらさん	ガッ	まっ の	らん ぎん	めがね
10	9	8	7	6
お の	お の (おん)	ま が らり	お の た い の た い	お の た い の た い



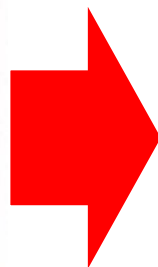
5	4	3	2	1
ふらさん	かけっ こ	まっ の	らん ぎん	めがね
10	9	8	7	6
お の た い の た い	お の た い	ま が らり	お の た い の た い	お の た い の た い

9月 5点

3月 10点

【3-3】個別の児童の得点変化の結果

5	4	3	2	1
い う せん	か い っ こ	ま っ ぽ う	へ ん ぎ ん	め が ね
10	9	8	7	6
お ぼ う の	お っ ま	ま ま ん	お さ か の が あ	お お ま さん



5	4	3	2	1
い う せん	か い っ こ	ま っ ぽ う	へ ん ぎ ん	め が ね
10	9	8	7	6
し ょ う ぼ う の あ ま ま ↑	お お ま さん	ま ま ん	し ょ う ぼ う の あ ま ま	お と う さん

9月 4点

3月 10点

【4】全結果のまとめ

1 誤答率（誤答数÷全問題数）から

1組は、15.3%から2.8%へ減少し、2組は、26.4%から2.7%へ減少した。定着の指導は効果が認められた。

2 正答数7点以下（要支援）の児童数

学年で18名から0名に減少した。

3 要素ごとの誤答特徴（誤答率等）から

1) 特殊音節

拗音は、19.35%が1.65%となった。促音は19.1%が2%、長音は16.1%が0.8%となった。

2) 濁音は、8.4%が0.95%となった。半濁音は、3.95%が0%となった。

V 考察

1「小学校1年児童に対して、ひらがな学習の確実な定着を図る」という目的は、概ね達成されたといえる。

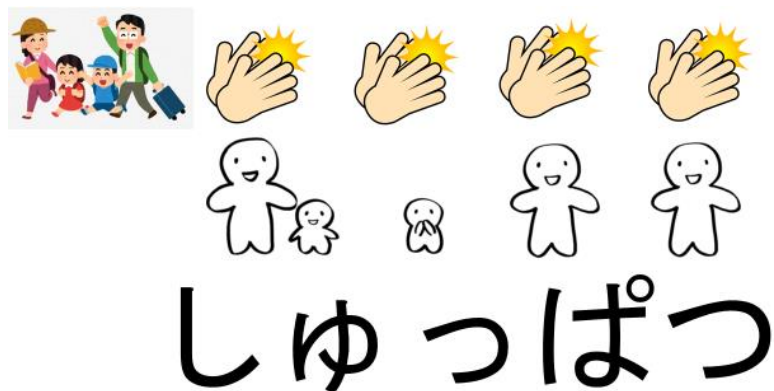
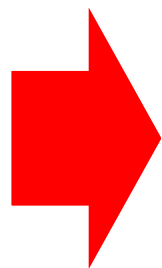
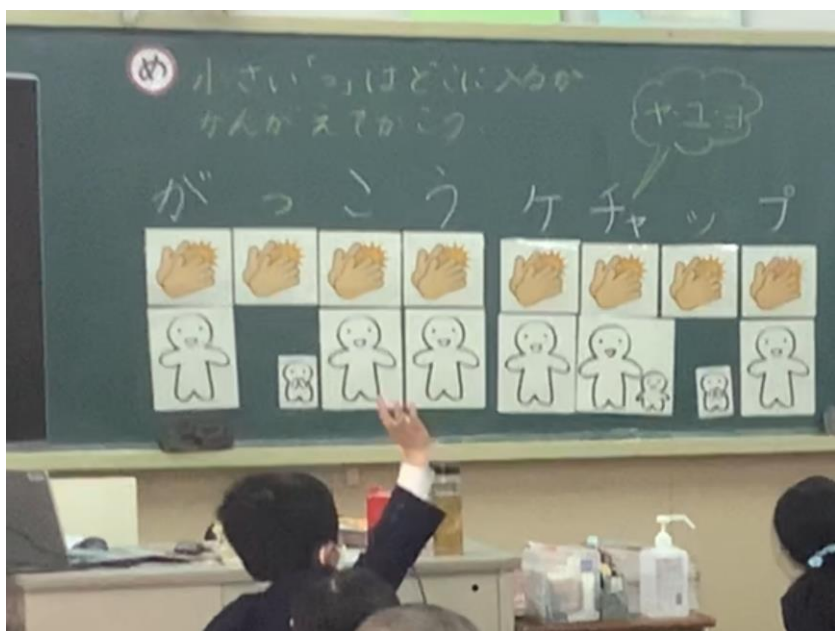
2 「PPTによる拗促長音の練習」について

①誤りの多い単語を、誤りの表記のまま発音させ、どこが誤っているのかを認識する活動は、単語に対する児童の注意力を高め、文字一音韻の分析力を高めると思われた。児童は1単語を表記どおりに読めるようになるにつれ、正しく聴写できるようになった。

②PPTを用いて、文字だけではなく、○や×、単語の意味を表す絵を同時に表示することで、視覚的にも理解を促すことができたと考えられる。

③促音の学習については、初めに行ったカードによる学習の後に、PPTによる学習も追加した。カードを用意したり、**貼り**替えたりする手間が軽減され、手軽に取り組めるようになったので、指導回数が増加した。

促音を学習する際には、すべての音をリズム打ちし、音が聞こえないところにちいさな「っ」が入るという考え方で取り組み、特に理解が難しかった**一部**の児童の理解が深まった。



- ④ 拗音の学習については、「ちゃ ちゅ ちょ」などは親子の絵を見せながら、「とてもなかよしだから、間に他の子は入り込めないよ」と指導し、「ちっや」などの間違いをする児童が減少した。
- ⑤ 長音について、ひらがなで長音符号を使用してしまう児童が多く見られたので、注意を喚起する定型文を表示するようにした。結果として、長音の誤りは見られなくなった。

以上の点から、「PPTによる拗促長音の練習」という指導方法は、正しい表記を身に付けるために有効であったと考えられる。一方、PPTによる練習では書く力に直結しにくいいため、プリントによる学習の併用も必須であった。

3 本校の一年生は、書く力を伸ばすために、週末にあのね帳を書くこと、読んだ本についてコメントを書く読書ノートの二点に取り組んでいる。ひらがな単語の表記がスムーズになるにつれ、「あのね帳や他教科のワークシートなどを書く際にも誤りが減ってきた」という声が学級担任から聞かれた。また、読書ノートについても、はじめは絵ばかり描いている児童が多かったが、文章で書けるようになってきている。早い段階での確実なひらがなの習得は、その後の学習活動をすすめる上で児童の意欲につながる重要な要素であると考えられる。

4 今後は、カタカナについてもPPTによるフラッシュカードの学習も検討し、よりスムーズな読み書きの習得につなげていきたい。